

「過越の小羊なるキリスト」

おはようございます。今月10日に近畿地方における梅雨入り宣言が出されて2週間が経ちましたが、大変蒸し蒸しする寝苦しい暑さが続いています。それに加えて、東京の方では、コロナの感染者が増加傾向にあり、未だ予断を許さない状況にあることが報じられていますが、梅雨時の真っ只中であって、健やかで平穏な日常生活へ向かうよう切に祈りたいと思います。また、集中豪雨や土砂災害が懸念されている地域の人々とその生活が守られ、支えられますように祈ります。

さて、本日からIコリント書の5章に入りました。使徒パウロによるコリント教会の人々への挨拶に始まり、教会内の分派の問題について見てきましたが、5章以降次の6章までは、コリントの教会に深く関わる不道德な問題に関して触れられています。信仰生活の浅い方や求道者の方々にとっては、神の言葉である聖書に、このような内容が書かれていることに驚きを禁じ得ない人々も多いのではないかと思います。本章で書かれている不道德不品行の問題は、コリントという町の地域性と大いに関係していたと考えられます。以前にも触れていますが、本章の内容に入る前に、コリントの町の地理的な状況について、もう一度振り返ってみたいと思います。パウロの時代、ローマ領アカイア県の首都であったコリントの町は地中海の東と西の両世界を結ぶ交通の要所にあり、国際的な商業の中心地として大変栄えていました。港湾都市として船舶や旅人の往来が激しく、人種的にも雑多な町でありました。そのため東西の文化や宗教も入り混じり、商業のみならず、文学や美術の面でも優れた有力都市の一つでありました。しかしながら、その経済的な繁栄の陰には道徳的な頹廃があり、風紀の悪い町としても知れ渡っていました。特に女神アフロディテの神殿は有名であり、標高575メートルのアクロコリントの山の上にあるその神殿には、約1000人もの神殿娼婦たちが仕えており、そこは放蕩の場と化していたと言われています。それ故、「コリント人」と言えば不道德な人々の代名詞となるぐらいで、「コリント風に生活する」という言い回しは、不品行な生活することを意味していました。

本日のIコリント書5章～6章の内容は、そのような不道德な行為が日常生活の中で蔓延していた地域にある教会として、教会内部に生じていた不品行の問題について、包み隠すことなく触れている箇所と言えます。パウロは5章の冒頭において、このように述べています。「現に聞くところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしているとのことです。それにもかかわらず、あなたがたは高ぶっているのか。むしろ悲しんで、こんなことをする者を自分たちの間から除外すべきではなかったのですか。」と書かれています。この所に登場する「父の妻」というのは、おそらく義理の母か、継母の事を言っているのだと思われますが、パウロはそのような行為は、異邦人世界でも見られない悪行であると告げています。あなたがたはそのような悪しき行いを悲しみ、不品行な者を交わりから取り除くべきであるにもかかわらず、むしろ誇り高ぶっていると指摘しています。また、私は物理的には、コリントの地から離れた場所に現在いるが、私の心と思いは、今その場にいる者であるかのように、不品行な者に対する裁きを主の御名によって下しているのであると述べています。けれども、パウロがそのような人々を審判するのは、彼らがやがて相応の罰を受けるにしろ、生前に悔い改めの思いが与えられて、主に立ち返り、主の日に彼らの霊が永遠の命を獲得することこそが、一番の目的なのであると告げています。

さて、5章6節以降8節まで、コリント教会の内部に存在したそのような腐敗した体質を悔い改めるようにとの勧めの言葉が述べられています。この短い文言の中に合計6回に渡り「パン種」というキーワードが登場していますが、このパウロの言葉を理解する鍵はユダヤ教の三大祭の一つである過越祭にあると言えます。過越祭というのは、ユダヤ教の三大祭の最初の祭であり、イスラエルの歴史を語る上で避けて通ることの出来ない、出エジプトの出来事を想起して祝う春の祭りをさしています。過越祭は別名、種なしパンの祭、もしくは除酵祭とも呼ばれています。除酵祭とは、酵母を除く祭と書きますが、イスラエルの民が過越祭の期間中、神様がお命じになった酵母(イースト)を入れないパンを食べたことに由来しています。酵母とは、酒の醸造やパン作りには欠かすことの出来ないものでありますが、過越祭の期間中は、なぜ酵母が除かれた種なしパンが用いられたのでしょうか？それは、酵母、つまりパン種というのは、発酵した練り粉のことをさしており、「発酵」という現象は、神を信じるイスラエルの民にとっては、腐敗や堕落を象徴的に表していたからでありました。それ故、過越祭の前日になると、ろうそくを灯し、家中のパン種を探しては取り除くというユダヤの慣習に見立てて、パウロは「新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。」(7節前半)と告げているのであります。また、過越祭の「過ぎ越す」というのは、いにしえの時代、神様の裁きがイスラエルの民の家々を過ぎ越し、彼らの初子を免れさせたことに由来しています。エジプトの王であるファラオの頑なで、おごり高ぶった心に対して、主が裁きを下された時、選民であるイスラエル人たちは主の命じられた通り、入り口の鴨居と2本の門柱に過越の犠牲となる小羊の血を塗りました。その事によって彼らの初子(最初に生まれた男の子)は主の裁きから免れることが出来たのであります。使徒パウロはその過越の小羊を、人類の罪のために十字架で死なれたキリストに置き換えて、「キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。」(7節後半)と述べています。私たちの過越のいけにえとなられたキリストが、すでに屠られた(贖いの死を遂げられた)のだから、古いパン種を全て取り除き、パン種の入っていない誠実で、真実なパンをもって過越祭を祝おうではないか！と勧めているのであります。まるで酵母が粉のかたまり全体をふくらませるように、教会全体に悪影響を与え、広げるようなものではなく、各々が自分自身を律し、教会の徳を高めることを目当てとして歩むようにと、パウロは戒めの言葉を述べているのであります。彼は続く6章において、小羊の尊い血潮によって贖い出された私たち一人一人の体が、キリストの体の一部とされており、「神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿」(6章19節)であると教えています。過越の小羊なるキリストという、これ以上に勝るものはない最上の代価を払って、私たちは買い取られたのであるから、「自分の体をもって、神の栄光を現しなさい。」(6章20節)と勧められているのであります。

今週から新たな月に入りますが、コロナ禍に加えて厳しい暑さが重なり、日常の生活において忍耐を要する局面が多々あらうかと思いますが、爽やかな聖霊の風に押し出されて、主に対する望みをもって歩んでゆこうではありませんか。